

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770293

研究課題名(和文)近代日本における地域の経済発展の論理と構造に関する歴史地理学的研究

研究課題名(英文)A historical geography study on the logic and structure of regional economic development in modern Japan

研究代表者

湯澤 規子(YUZAWA, Noriko)

筑波大学・生命環境系・准教授

研究者番号：20409494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代日本における地域の経済発展の論理と構造を歴史地理学の視点から明らかにすることを目的とした。

課題1として山梨県における葡萄栽培と葡萄酒醸造業に着目し、産業の革新に対して地域の人びとが果たした役割を明らかにした。課題2として秋田県における林業と材木加工業に着目し、主に近代の地域資源と地域社会の関係の変遷を明らかにした。また、比較対象として、近代愛知県の産業地域の形成過程に関する調査も実施した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the logic and structure of regional economic development in modern Japan from view point of A historical geography.

The first subject was about the cultivation of grapes and making wine in Yamanashi prefecture. In this case study, I revealed the importance of local people's role in industrial innovation. The second subject was about forestry and wood processing industry in the Akita prefecture. In this case study, I revealed the transition of the relationship between modern regional resources and community. Furthermore, I began investigation about formation process of industrial area in modern Aichi prefecture.

研究分野：人文地理

キーワード：歴史地理学 近代日本 地域の経済発展 地域資源

1. 研究開始当初の背景

(1) 在来的経済発展論の成果と課題

在来的経済発展論はこれまでの経済史において重視されてきた単線的な経済発展論に対して複線的な経済発展論を提唱し、「在来産業と近代産業の相互補完関係」という新たな歴史像を提示した点で重要である。

しかし、その分析の中心は第二次産業、とりわけ織物業等の製造業に重点が置かれているため、なお見落とししてきた部分があると言わざるを得ない。具体的にいえば、第一次産業、第三次産業をも含めた在来産業と近代産業の関係史を構築することが課題である。地域の経済発展は第二次産業のみならず、各地域の資源を最大限に活用した第一次産業の発展を主軸とした各産業間の相互関係によっても支えられていたはずである。この点を具体的事例に基づいて明らかにすることは、各地域の経済発展構造を解明することにつながり、その地域比較研究により日本経済の基層構造を相対的視野から解明することが可能となる。

(2) 地域の経済発展の論理

近代日本の経済発展は在来産業と近代産業の相互関係によって実現したことは、「在来的経済発展論」として谷本(1998)によって指摘されている。これまで代表者はその視点をふまえて日本の織物業、葡萄酒醸造業に関する調査研究を進めてきた(湯澤 2009, 2011)。その過程で、近代日本においては国民国家経済の形成のみならず、各地域においても各々の地域資源を活用した独自の論理による経済発展が見られることが示唆された。

近代における経済発展は大別して①中央資本や政府主導の近代企業の設立と、②農山村を基盤とした地域の人々による企業の設立という2つの側面がある。日本の場合、近代的な企業や産業形成の試みは、一部の都市のみならず広範な農村地域にも展開し、それがその後の経済発展において重要な意味を有していた。本研究では、それを「地域の経済発展の論理」と定義した。

①の膨大な研究蓄積に比べて②の研究蓄積は多いとは言えない。その背景には、既往の研究では近代日本における国民国家経済の形成史に主眼が置かれ、地域で生じた多様な近代化、産業化が等閑視されてきたことがある。そのため、近代における地方(じかた)文書が各地域に残存しているにも関わらず、その整理や調査研究は課題として残されている。したがって、それらの資料発掘および整理作業も合わせて実施した。

(3) 地域史・技術史・社会史・経済史

代表者はこれまで、歴史地理学的視点から織物生産地域を事例として日本における在来産業の展開を地域の歴史と関わらせながら調査研究を進めてきた(湯澤 2008, 2009, 2011, 2012)。特に明治・大正期の近代化過程および、第二次世界大戦後における高度経済成長期を变化の画期と捉え、在来産業を支えてきた地域経済の構造および家族経営という形態が日本経済の基層として重要であることを指摘してきた。近年では葡萄酒醸造業や林業が展開した地域における調査を進めつつあり、近世期から近代期を中心に社会の変容と産業の変遷を追究してきた。これら一連の研究は、伝統的な日本社会を特徴づけてきた地域秩序や技術体系、それらが地域経済において如何なる意義を有してきたのかを解明しようとしている点で共通している。特に農業や農産加工業の技術史をふまえた分析は、近代日本に関する研究における重要な課題である。

2. 研究の目的

本研究は近代日本における地域の経済発展の論理と構造を歴史地理学の視点から解明することを目的とする。代表者は在来産業と近代産業の相互関係を明らかにした「在来的経済発展論」の視点をふまえて日本の織物業、葡萄酒醸造業に関する調査研究を進めてきた(湯澤 2009, 2011)。その過程で、近代日本においては国民国家経済の形成のみならず、各地域においても各々の地域資源を活用した独自の論理による経済発展が見られることが明らかになってきた。そこで本研究では、それを「地域の経済発展の論理」として検討し、その後の社会に与えた影響と意義を解明することを目指した。

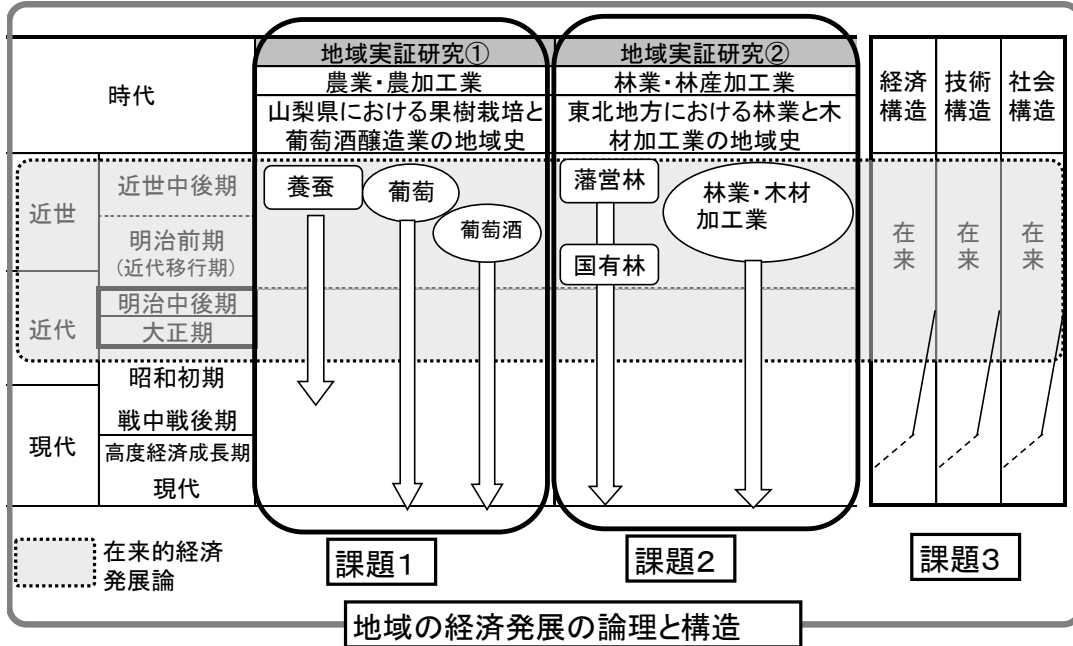
3. 研究の方法

(1) 研究方法

図1に示したように、まず、課題1では地域実証研究①として、山梨県における葡萄栽培と葡萄酒醸造業の地域史を解明する。小課題として(1)勸業・勸農政策と民間葡萄酒会社の展開とその比較、(2)葡萄栽培と葡萄酒醸造業の技術導入とその伝播、(3)養蚕業と葡萄酒醸造業の展開と関係から見た地域経済の構造の3つを設定する。課題2では地域実証研究②として、東北地方における林業と木材加工業の地域史を解明する。小課題として(1)秋田県における旧土族と横手殖林社の展開、(2)東北地方における地域資源と地域社会—近代～現代—の2つを設定する。

以上の実証研究を通して共通して検討するのは、在来産業と近代産業との相互関係を「経済構造」、「技術構造」、「社会構造」との

図1 問題意識と課題の構成



関わりから明らかにすることである。以上を総括して、課題3として地域の経済発展の論理と構造を提示する。

(2) 史料と分析

いずれの研究も、フィールドワークに基づく一次史料の発掘、整理、分析および聞き取り調査を主たる研究方法とする。具体的には課題1に関しては、「宮光園史料」、山梨県立博物館蔵の「葡萄酒会社関係史料一括」、地方の農書『葡萄三説』、『甲州葡萄手引草』などの撮影、分析を進める。課題2に関しては、秋田県横手市の「横手殖林社史料」などを中心とした地方文書の撮影、分析を進める。そして、課題3に関しては、上記2つの課題と比較研究可能な事例地域を加えつつ、各事例研究の進捗状況をふまえつつ、研究成果を総括する。

4. 研究成果

(1) 山梨県における果樹栽培と葡萄酒醸造業の地域史

明治前期の史料分析(祝村葡萄酒株式会社史料、祝村文書、宮崎家文書)を中心に据え、近世以来の葡萄栽培技術の上に、新たな西洋葡萄栽培と葡萄酒醸造業がどのように導入され、展開したのかを考察した。その結果、新たな産業の担い手たちは、村政の担い手であり、農業技術者であり、かつ、養蚕・製糸業を手掛ける事業家でもあったことが明らかになった(図2)。

以上の内容を「山梨県八代郡祝村における葡萄酒会社の設立と展開—明治前期の産業

と担い手に関する一考察—」、歴史地理学、査読有、55-3、2013、pp. 1-22、「『地域資源の歴史地理』研究の課題」、歴史地理学、58(1)、査読有、2016、pp. 1-4として発表した。

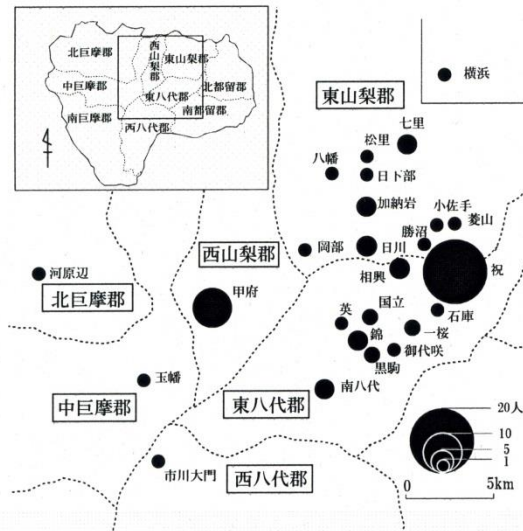


図2 祝村葡萄酒会社の株主分布
資料)「発起人名簿(葡萄酒会社関係一括資料 歴2005-072-9 山梨県立博物館所蔵 山梨県『明治三十六年山梨県勸業年報』山梨県、1906年より作成。

この成果を発展させ、平成26年10月1日~11月30日まで甲州市立勝沼図書館にて史料展(「時代を拓く有志の群像—葡萄酒づくりの幕開けと勝沼の人びと」)の企画に携わり、講演「先人の足跡を歩く—農書と『葡萄三説』の世界—」を行った。これらの活動は研究成果の社会的還元という意味をもち、さらには地域史料の保存と利用への社会的関

心を高める役割を担った。

次に、当地域では現在も葡萄栽培、葡萄酒醸造業が継続していることに鑑み、150年間の歴史をまとめた。具体的には「地域資源」の問題に関連づけて、大正期、昭和期へとつなげて経年的に分析した。これを平成27年度歴史地理学会大会シンポジウム「地域資源の歴史地理」において報告し、「地域づくりの系譜—山梨県甲州市の甚六桜とかつぬま朝市—」、歴史地理学、58(1)、査読有 pp. 57-72 として発表した。

甲州市が所蔵する宮光園文書や山梨県立博物館が所蔵する祝村葡萄酒会社一括資料については、撮影済みの史料分析を進めるとともに、撮影を継続していく予定である。

(2) 東北地方における林業と材木加工業の地域史

① 秋田県における林業と横手殖林社の展開

地域の経済発展の論理を探るもう1つの事例として、東北地方における林業とその加工業を取り上げた。本課題では、まず、秋田県横手市において明治期に設立された横手殖林社の展開を明らかにすることで、地域の人々が地域資源とどのように向き合い、経済活動をしてきたのかを考察する。横手市において同社の史料整理を継続し、平成28年度中に目録作成が完了した。図3は所蔵されている史料のうち、絵図・地図類によって作成したものである。

史料目録によれば、地域と林業、山林資源との関わりについて、近代から現代まで経年分析することが可能であるという見通しが得られた。今後、これらの史料の撮影を始め、本格的な分析に取りかかる予定である。同社の担い手は、旧士族が中心となっている。地域の特徴を反映した担い手が地域における経済活動を牽引していくことは山梨県とも共通しており、その担い手の特徴が地域によってどのように異なるのかを考察していきたい。

② 近世・近代北秋田市の地域社会

上記①の事例研究を地域資源と地域社会という枠組みで整理すると共に、上記事例と

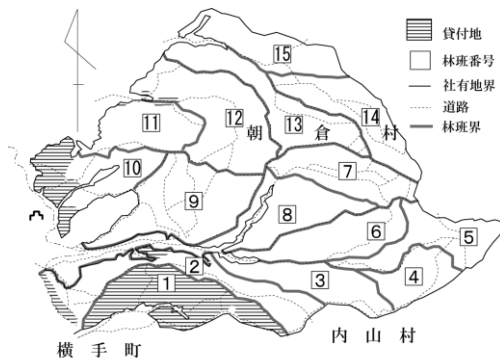


図3 株式会社横手植林社有地林相図 (昭和6年)
横手町大字前郷・朝倉村大字睦成 字城付山林
資料：横手植林社資料

比較しうる地域を北秋田市に選定し、北秋田市における地方文書の整理作業、及び聞き取り調査を進め、東北地方における地域資源と地域社会との関わりを明らかにした。近代の分析だけでなく、近世を視野に入れることで、課題1で考察した在来と近代との関わりについて言及することができた。

以上の内容を「阿仁銅山山麓における山村社会の森林資源管理—秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と復刻—」、筑波大学農林社会経済研究、査読有、30、2015、pp. 1-54、「阿仁川上流域における村社会と耕地管理—秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と復刻—」、査読有、筑波大学農林社会経済研究、31、2015、pp. 1-56、「公務日記にみる近代村の成立過程—秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と復刻—」、査読有、筑波大学農林社会経済研究、32、2016、pp. 1-67 としてまとめた。

(3) 総括にかえて

—地域の経済発展の論理と構造—

上記2つの事例分析を相対化するために、愛知県尾西地域における産業地域形成に関する史料収集に着手した。農業とその加工業に特化した山梨県の事例、および林業とその加工業に特化した秋田県の事例とくらべて、近代愛知県では農業と工業の双方が影響を及ぼしながら、よりダイナミックな地域構造転換が進んだ。それを尾西織物業地域と都市近郊農村との相互関係から明らかにした。

その成果を「近代尾西織物業地域にみる農工関係の変容過程—鈴鎌工場史料の分析を通して—」、農業史研究、査読有、49、2015、pp. 41-58、「近代日本の産業地域形成期における農家経済構造の変化—愛知県『農家経済調査』にみる農家の暮らし—」、史林、99(1)、査読有、2016、pp. 177-207、「『下肥』利用と『尿尿』処理—近代愛知県の都市化と物質循環の構造転換—」、農業史研究、51、2016、pp. 23-38 としてまとめた。

以上、3つの事例研究（山梨県、秋田県、愛知県）とも、新たな一次史料の発見を伴い、その整理・公表も本研究の成果の1つとなった。

本研究は近代日本における地域の経済発展の論理と構造を歴史地理学の視点から解明することを目的とした。結論を総括すると、近代日本においては、国民国家経済のみならず、各地域において、各々の地域資源を活用した、独自の論理による経済発展がみられたことが明らかになった。それは、農業、工業、商業それぞれが相互連関しながら展開する、構造的な変化であった。

以上の分析の過程で、近代日本の経済発展

の過程では、企業の勃興や分業化の進展と合わせて、消費、教育、労働、医療、福祉など「人びとの生活基盤」が大きく再編され、それがさらなる産業化へと繋がったことが示唆された。今後はさらに「産業地域の形成」と「生活基盤の再編」の相互関係を解明し、新たな近代地域史を構築する必要がある。これを課題として、引き続き調査研究を進めていきたい。

〈参考文献〉

- ・谷本雅之(1998)『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会。
- ・湯澤規子(2008)「漁村集落における家族就業構造と女性のはたらき—銚子沿岸集落を事例として—」石井英也編『景観形成の歴史地理学』二宮書店、207-216頁。
- ・湯澤規子(2009)『在来産業と家族の地域史—ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』古今書院。
- ・湯澤規子(2011)「甲州勝沼におけるぶどう生産とワイン醸造の展開」国立歴史民俗博物館『平成の酒造り』10-11頁。
- ・湯澤規子(2012)「都市近郊農山村における高度経済成長期という経験—住民の就業履歴および平仙レース社内報『むつみ』の分析を通して—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第171集、43-64頁。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

- ①湯澤規子、「下肥」利用と「尿尿」処理—近代愛知県の都市化と物質循環の構造転換—、農業史研究、51、2017、pp. 23-38
- ②渡部圭一・芳賀和樹・湯澤規子・加藤衛弘、公務日記にみる近代村の成立過程—秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と復刻、査読有、筑波大学農林社会経済研究、32、2016、pp. 1-67
(<http://hdl.handle.net/2241/00146076>)
- ③湯澤規子、近代日本の産業地域形成期における農家経済構造の変化—愛知県『農家経済調査』にみる農家の暮らし—、史林、99(1)、査読有、2016、pp. 177-207
- ④湯澤規子、地域づくりの系譜—山梨県甲州市の甚六桜とかつめま朝市—、歴史地理学、58(1)、査読有、2016、pp. 57-72
- ⑤湯澤規子、「地域資源の歴史地理」研究の課題、歴史地理学、58(1)、査読有、2016、pp. 1-4
- ⑥渡部圭一・芳賀和樹・湯澤規子・加藤衛弘、阿仁川上流域における村社会と耕地管理—秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と

復刻、査読有、筑波大学農林社会経済研究、31、2015、pp. 1-56

(<http://hdl.handle.net/2241/00137474>)

- ⑦湯澤規子、共同炊事と集団食からみた尾西織物業地域の近代一起共同炊事組合の史料に着目して—、歴史地理学、57(4)、査読有、2015、pp. 1-22
- ⑧湯澤規子、近代日本の記録史料としての『完訳 日本奥地紀行』—イザベラ・バード再読の意義—、農業史研究、査読有、49、2015、pp. 85-89
(http://doi.org/10.18966/joah.49.0_85)
- ⑨湯澤規子、近代尾西織物業地域にみる農工関係の変容過程—鈴鎌工場史料の分析を通して—、農業史研究、査読有、49、2015、pp. 41-58
(http://doi.org/10.18966/joah.49.0_41)
- ⑩渡部圭一・芳賀和樹・湯澤規子・加藤衛弘、阿仁銅山山麓における山村社会の森林資源管理—秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と復刻—、筑波大学農林社会経済研究、査読有、30、2014、pp. 1-54
(<http://hdl.handle.net/2241/00124305>)
- ⑪湯澤規子、山梨県八代郡祝村における葡萄酒会社の設立と展開—明治前期の産業と担い手に関する一考察—、歴史地理学、査読有、55-3、2013、pp. 1-22

[学会発表] (計9件)

- ①湯澤規子、「下肥」利用と「尿尿」処理—近代愛知県の野菜栽培の発展と都市化による物質循環の変化—、農業史学会、2016年3月28日、秋田市民交流プラザ ALVE (秋田県・秋田市)
- ②湯澤規子、胃袋の近代—食と人びとの日常史—、京都大学学知創生ユニット企画シンポジウム、2016年2月16日、京都大学人文科学研究所 (京都府・京都市)
- ③湯澤規子、地域づくりの系譜—山梨県甲州市の甚六桜とかつめま朝市—、歴史地理学会大会、2015年6月28日、山形県立米沢女子短期大学 (山形県・米沢市)
- ④湯澤規子、産業地域形成期における農家経済構造の変化とその地域性—愛知県『農家経済調査』にみる農家の暮らし—、史学研究会、2015年4月18日、京都大学 (京都府・京都市)
- ⑤湯澤規子、先人の足跡をあるく—農書と『葡萄三説』の世界—、甲州市立勝沼図書館企画展特別講演 (招待講演)、2014年11月9日、甲州市立勝沼図書館 (山梨県・甲州市)
- ⑥湯澤規子、共同炊事と集団食からみた尾西織物業地域と周辺農村の近代一起共同炊事組合・鈴鎌毛織機寄宿舎の史料に着目して—、歴史地理学会、2014年5月17日、長崎外国語大学 (長崎県・長崎市)

- ⑦湯澤規子、近代尾西織物業地域および周辺農村にみる生産・生活の合理化とその相関—共同炊事・工場寄宿舍・機械農場に着目して—、農業史学会、2014年3月18日、神戸大学(兵庫県・神戸市)
- ⑧湯澤規子、女性と家族から描く結城織物変遷史—織り手と家族のライフヒストリー分析を中心として—、栃木県歴史文化研究会第23回大会(招待講演)、2013年8月24日、栃木県立博物館(栃木県・宇都宮市)
- ⑨湯澤規子、山梨県勝沼町における葡萄の産地形成とその背景—養蚕から葡萄栽培への移行過程に着目して—、フード・セキュリティ若手リサーチセミナー、2013年6月24日、筑波大学(茨城県・つくば市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯澤 規子 (YUZAWA, Noriko)
筑波大学・生命環境系・准教授
研究者番号：20409494